

第 26 回 日本免震構造協会賞 – 2025 –

第 26 回日本免震構造協会賞は、右の 6 件に決定した。

表彰制度の目的

免震構造等の技術の進歩及び適正な普及発展に貢献した個人、法人及び団体に対して表彰することにより、免震構造等の技術の確実な発展と安全で良質な建築物等の整備に貢献していくことが本協会の表彰制度の目的である。

表彰の対象

功労賞は、多年にわたり免震構造等の適正な普及発展に功績が顕著な個人に、技術賞は、免震建築物等の設計・施工及びこれらに係る装置等に関する技術としての優れた成果を上げた個人、法人及び団体に、作品賞は、免震構造等の特質を反映した格別に優れた建築物等の実現に主たる貢献を行った個人、法人及び団体に、業績賞は、免震構造等の特質を反映した、建築物等の優れた設計、改修、保全、維持、復元、困難なプロジェクトの実現等において際立った業績をあげた個人、法人及び団体に、普及賞は、免震建築物・免震啓発活動・免震に係わる装置等により免震構造等の普及に貢献した個人、法人及び団体に贈る。

表 彰

2025 年 6 月 10 日
一般社団法人日本免震構造協会通常総会後

一般社団法人日本免震構造協会表彰委員会委員

山梨知彦（委員長）
大西宏治 城所竜太 小林恵吾 小林 仁
齊藤大樹 榊間隆之 佐々木大輔

選 考 結 果

第 26 回日本免震構造協会賞受賞は下記の 6 件である。

I 技術賞

- 1) 長周期・大振幅地震動に対応した多段すべり支承
『TSB』の開発と実装
株式会社内藤建築事務所 田山太郎
株式会社織本構造設計 米本孝志
日鉄エンジニアリング株式会社 関 星宇
株式会社 P I L L A R 林田佑介
半田市立半田病院 青木賢治
- 2) 巨大地震時の過大な水平変位を抑制する変位検知型
性能可変オイルダンパー（VOD®）の開発と適用
株式会社奥村組 小山慶樹 舟木秀尊
有限会社シズメテック 鎮目武治
東北大学 五十子幸樹 井上範夫

II 作品賞

- 1) エスコンフィールド HOKKAIDO
株式会社大林組 長屋圭一 佐藤朋成
木村寛之 柏保明子
田中嘉一
- 2) 名古屋シミズ富国生命ビル
清水建設株式会社 石倉 敦 小嶋一輝
木内佑輔 國立篤志
松本昭二郎
- 3) 富士ソフト汐留ビル
株式会社竹中工務店 三橋幸作 田井 暢
小田島暢之 和田純一
平尾雅之

III 普及賞

- 1) 令和 6 年能登半島地震被災時にも
機能の維持・医療活動の継続を可能とした免震構造
～恵寿総合病院本館～
社会医療法人財団董仙会 / 恵寿総合病院 神野正博
株式会社竹中工務店 神野厚美
岡田純一
(敬称略)

審査経過

前提および共通事項

本年度の免震構造協会賞選定作業は、応募書類を用いた一次審査、その後、ヒアリングや現地審査とその結果を踏まえた二次審査を行い、最終的に投票により過半数を超えたものを議論し、最終的には委員全員の合意を持って受賞作を決定しました。

技術賞

応募総数は5件でしたが、一次審査ですべての案が過半の支持を得たため、5件すべてにヒアリングを行いました。この結果をもとに審議し、最終的に投票を行い、「長周期・大振幅地震に対応した多段すべり支承『TSB』の開発と実装」と「巨大地震時の過大な水平変異を抑制する変位検知型オイルダンパー（VOD®）の開発と適用」の2件が過半数を超える得票を得たため、まず技術賞の最終候補としました。次いで、過半数を超える得票はなかったがこれに近い得票を得たものについて議論を行い、再度の投票を行いました。過半数を超える得票は得られませんでした。この結果を協議し、全委員の合意として、過半の得票を得た2件を技術賞に決定しました。

作品賞

本年は17作品の応募がありました。一次審査での議論と投票の結果、7作品が過半の支持を得たため、この7作品を対象に現地審査並びに二次審査を行うことになりました。この結果をもとに審議し、最終的に投票を行い、「エスコンフィールド HOKKAIDO」、「名古屋シミズ富国生命ビル」、「富士ソフト汐留ビル」の3作品が過半数を超える得票を得たため、まず作品賞の最終候補としました。

次いで、過半数を超える得票はなかったがこれに近い得票を得た作品について議論を行い、再度の投票を行いました。過半数を超える得票は得られませんでした。この結果、全委員の合意として、過半の得票を得た3作品を作品賞に決定しました。

業績賞

本作品は2件の応募がありましたが、二次審査において投票を行ったところどちらも過半数に届きませんでした。引き続き審議を行いました。積極的に両作品を推す声が出ませんでした。この結果を協議し、全委員の合意として、本年は業績賞に該当する作品は無しとしました。

普及賞

一件の応募があり、一次審査時に議論をした結果、いずれの審査員からも賛同が得られたため、受賞としました。
(山梨 知彦)